

田辺市総合計画審議会

第2回分科会

(活力・快適グループ)

会議録

田辺市総合計画審議会第2回分科会（活力・快適グループ）会議録

日 時	令和3年10月11日（月）午後1時30分～午後4時
場 所	田辺市役所 本庁舎3階 第1会議室
出席委員	8名
欠席委員	4名
傍聴者	なし
会議事項	1. 開 会 2. 高校生座談会 録画映像視聴 3. 議 事 （1）後期基本計画原案の修正について ・第2章「活力」 ・第6章「快適」（分科会協議事項「庁舎跡地利活用」を含む） ・第7章「計画推進」 ほか 4. その他 5. 閉 会

1. 開会

2. 高校生座談会 録画映像視聴

【映像を視聴した感想】

（A委員）

高校生の皆さん、いいところは自然があって、食べ物が多いということでした。問題点といえば、仕事がないこと、情報発信が不足しているということで、市長さんも仕事はあるけど、選んでやりたい仕事がない、これは問題だし、僕らも仕事はハローワークに行きながら見ていると、仕事はあるのはあるんですが、それで生活できるかというところがあります。総支給額で15万円だと、そこからいろいろ引かれて10万円以下になります。仕事をして生活できない構造じゃなくて、ちゃんと仕事をして生活ができる、そういう仕事でないとなかなか人も増えていかないのではないかと考えています。

（B委員）

感想的な話で言いますと、吉野熊野国立公園の名称をしっかりと挙げていただいたことや、自然公園の活用という話もありましたが、そういう観点を高校生が持っていていただくことが、吉野熊野の管理官としては、すごく嬉しいと思った次第です。全体的な話ですと、PR不足という指摘が突出していたと思っています。白浜地域でのワーケーション推進については、環境省や観光庁と一緒にワーケーションを推進していることや、ワーキングホリ

デーも紹介させていただいていることもあって、白浜地域が目立ってしまっていると思っています。そのことが、難しいというか、難点なのかなと思っています、そのあたりをどう発信していくのが、すごく大切になってくると思った次第です。

(C委員)

高校生がこんなに地域にフォーカスして生活していると思っていなくて、すごいみんな地域にフォーカスして生活しているんだなと思いました。それから、やっぱりこのまちが好きで、よくなってほしいと思っているというのは感じましたし、一度出ていったとしても、課題がクリアになれば戻りたいとみんな思っているんだなとも思いました。出て行って戻りたくないとか、そういう感じではないんだなというのがよくわかりました。あと、観光にしてもPR不足、宣伝不足といった意見が多かったと感じています。おそらく今の若い人たちに届くツールが、今までとは全く違うと思うので、観光に関わらず、全体としてなのだと思いますが、もう少し方法というか、ツールを若い人たちにも届きやすいようなものに変えていかなければならないんだらうなと思います。ただ、みんな女子で、男子が一人もいなかったの、男子の意見だとどうだったのかなと少し思いました。

(D委員)

自分の時を思うと、今の子供って本当に素晴らしいなというのが一番の感想です。僕は高校を卒業した後、田辺を出て、12~13年県外で過ごしてから戻ってきましたが、本当に出ていきたいばかりで、みんなから「ええところに住んでるな」と言われても、いつも田舎やからとしか言えませんでした。でも、今の子供たちは、学校で地域学習の授業もたくさんあって、自分の郷土を愛せるような授業があるので、自分たちのときよりは、もっと地域のことを考える子供たちになっていると思っています。ただ、市長の回答にもあったように、仕事はあるけど、やりたい仕事は今が多すぎて仕事がないのだらうと思っています。今日は水産振興会という立場で来ているので言いますが、我々の漁業もなかなかうまくいかない状態で衰退していくばかりです。新規就業の話もありますが、なかなか仕事に結びつけてあげられないというのが実情です。魚がないのか、魅力がないのか、収入が低いことも含めて、自分たちももっと頑張っていかなければならないというのが感想です。

(E委員)

広域商工会くまの協議会は、上富田の商工会と田辺の5つの商工会で構成する協議会で、その中の牟婁商工会から来ています。仕事ということで、少し話をさせていただきます。田辺には商工会が5つあって、龍神、大塔、中辺路、本宮、そして牟婁とあるのですが、私の所属している牟婁商工会は旧牟婁町になります。牟婁は準農村地帯で、コロナの影響もなく、本当に恵まれた地域です。あまり夢のない話ばかりしてるようですが、結構後継者もいて、本当にいい地域だと思っています。商工会議所も含めて、どことも会員増強を目指していて、

他の商工会は会員が減ってきて大変だと聞きますが、牟婁商工会は下三栖に企業が増えてきているのと、農家の六次産業化ということで、ネット販売等で若い子に取り組んでいて、農家の方も会員に入れていくことで、会員が増えています。若い会員が増えてきた中で、何かしようということで、UMEロードマラソンを発案してやってくれて、ここ2年はコロナで中止になっていますが、そうした取組もある中で、会員も増えてきている状況です。自分たちの世代でやる気のある農家はみんな後継者もあって、上芳養は本当に恵まれた地域だと思っていますが、規模を拡大に伴って、梅取り時期の人手不足が一番厳しいと感じています。10年前になります、田辺の梅干組合の理事長をさせてもらっているときに、公正取引委員会が入ってきて、それから2～3年は梅業界で冬の時代がありましたが、最近、テレビでも取り上げてもらう機会が増えてきて、農家の所得もかなり上がってきているので、夢のある感じがしています。一つ、要望ですが、田辺市に大学の農学部や農業試験場を作ってもらいたいと思っています。大学進学となると経済的な負担も大きく、みんながみんな大学に行けるわけではないので、大学か研究施設を田辺市で作ってもらえれば、もっと人が増えると思います。

(F委員)

皆さんおっしゃっていましたが、高校生はしっかりしていると思いました。自分の娘も座談会に参加していた高校生と同級生ですが、高校2年生で自分の娘はこんなに喋れないだろうと思いながら聞いていました。学校を卒業してすぐに地元で就職することがほとんどなく、進学してそのまま県外で就職するか、和歌山で就職して、何かのタイミングで帰ってくるパターンが多いと思います。自分もそのパターンで、たまたま自分は家の仕事をするために帰ってきましたが、そういう人間は珍しいと思います。市長は仕事がないわけではないと言ってくれていましたが、自分たち森林組合、林業という業界にしても、そのときに選んでもらえるようになるには、まだまだ足りないところ、特に給与面とか安全面とか、必要なことは多いと考えながら、聞いてました。一つ、論点がずれますが、龍神分校の学生だけ画面が荒いとかカクカクしているとか、ネット環境の問題かと思いますが、気になりました。合併前後は、テレビがケーブルテレビで光回線も無かったので、よくはなりましたが、先日も会話の中で、龍神で一番速度の出るネット環境にしても、映像関係の仕事をしている人からすると使い物にならない状態で、通信環境がよくないことが、足枷になっているんじゃないか、通信環境があれば、龍神で仕事ができるのに、という人もいたのではないかという話をしました。たまたま、そんな話をした後で、龍神分校の学生だけ、通信環境が不安定だったので、やっぱりそういうことがあるのかもしれないと思いました。

(G委員)

ちょっとがっかりしたのは、「次世代がもうバトンタッチしている」との感想が委員からあったように記憶していますが、そうは思いませんでした。

ふるさとの良さは高校生のみんな満足以上ですね。ただ働き場所となると、受け身ですね。無ければ自分で作る。難しいでしょう。

その後に会議にもありましたが、起業すること、若者も含めて代々商売している人以外は無理だと思います。

和歌山は徳川御三家、暴れん坊将軍吉宗の国は社会人となった時に遠く離れた場所でも自らの生まれを示す指標として話していました。

和歌山は帰りたくない田舎のワースト5みたいですね。かの松下幸之助さんは和歌山出身でも県内に工場は作りませんでした。体育館は建てていただきました。交通の便が悪すぎるみたいです。そんな和歌山で若者に大学で学んだ知識は、県庁や市役所だけじゃないと、帰りたいと思うサポートをしてやりたいと、思いました。難しいですよ。

(藤田会長)

皆さん視聴いただいてありがとうございます。本当に打合せもなしで、1時間で何がやれるのかと思いましたが、結構喋ってくれたなという気がしています。映像の最後にも申し上げましたが、一番感じたのは、我々は彼らにバトンを託すんじゃなくて、彼らの社会から預かっているということです。彼らの重要な20年後とか30年後とかの田辺市をここで議論しているというのは、多分ここにいらっしゃる方は20年後、30年後には相当リタイヤされている感じであって、むしろ彼らが社会の主人公になるのに、我々はその社会をどうするか議論しているという点に、責任の重たい話を預かっているんだなということを改めて感じたというのが一つと、関係人口という言葉以外に重要な概念があるのは、実は彼らもそうですが、何らかの事情で進学や就職で出て行って、その人たちが戻ってくるかどうかという、これを還流人口といいます。この還流人口をどう増やすのかということも非常に重要な話になっているなという気が改めてしました。すごく地域に想いを持っている彼ら、たまたま広報田辺のいろんな役割を引き受け、それがきっかけになって地元のいろんなことを知るというチャンスに恵まれたんだと思いますが、やっぱり教育かなという気がしていて、そういう想いを持った子供をどう地域の中で育てて、お土産を持たせて外へ出すということの必要性を、改めて聞いて非常に感じました。もう一つは、お土産を持たせるときの手法ですが、先ほど、C委員もおっしゃっていた、どういうツールで彼らに発信していくのかというところを、私も含めて割と高い世代の人たちで議論しても、そのツールがなかなかないんですよ。彼らが日常的にどういうツールでコミュニケーションしているのか研究した上で、田辺市の将来をどうしていく、ということをやちゃんと話を伝えていくということが必要なんだろうなという感じはしました。そういう点では、事務局に若い方々もいらっしゃるの、私を使い慣れたSNSの使い方も全然違うと思いますので、ぜひそういった部分も総合計画に、柔軟に反映していくということをしないと、結局は一番肝心の伝えないといけない人たちに伝わっていないという計画で終わってしまうかもしれないと非常に思いました。場合によっては、広報田辺のレポーターたちに、今回関わってもらったことをきっかけに、

高校生向けに田辺市の政策を伝えるようなことなんかも、ミッションとして彼らにやってもらってもいいかなと思いました。少々ずれていても、彼らなりの言葉で田辺が、地元のまちがやろうとしていることを伝えてもらう、そういうことをしてもらってもいいかと思います。あと一点、仕事に関して言うと、今回この分科会のメンバーは、たまたま第1回分科会でSDGsについて議論した方が多いですが、まさに林業や農業、漁業といった一次産業をどうするのかというのが、今のSDGsの中では重要なところで、ここが実はすごく可能性があると見ている人たちが増えているような気がします。福祉との関係、医療との関係、観光との関係、一次産業が持っている可能性というのは非常に広がっていくので、そのときのポイントは六次産業化となりますが、農以外の工と商を安直に東京資本に頼むのではなくて、地元でプレイヤーを育てるという形で、工と商を時間がかかっても育てるとことが重要だと考えています。そのことで、地域の中で経済が回ることになり、何より雇用が発生し、雇用が発生するということは税収が地域に落ちることにつながるので、一番効果的かなという気がしています。いずれにしても、いろんな想いを持っている地元の高校生たちの受け皿をもっと真剣に大人がつくることを考えなければならないという気がしました。

3. 議事

(1) 後期基本計画原案の修正について

(事務局)

では、次第の3、議事に移らせていただきます。今回、お配りしておりますA3横の資料をご覧くださいと思います。事前にお配りさせていただいた資料では、全ての意見等を記載した内容としておりましたが、先ほどもご説明させていただいたとおり、今日の分科会では関連する政策分野の内容、活力・快適グループの関連について、ご議論いただきたいと思いますので、関連する項目のみを抽出した形でお配りさせていただいております。

それでは、修正案がその内容でよいか、修正がない場合は原案のとおりでよいか、単位施策ごとに確認していきたいと思います。次回の審議会でもパブリックコメントの案についてご審議いただくため、できる限りこの場でご意見・ご質問をいただき、修正案を固めたいと思っています。本日は、関係課の職員も同席していますので、ご質問・ご意見等については、この場で対応させていただき、一定の形にできればと考えていますので、よろしく願いいたします。

まずは、No.32、通常は単位施策ごとに分類させていただいておりますが、こちらは活力全般に係るご意見でしたので、分野を活力としております。こちらについては、再生可能エネルギーを活用して、地域経済を豊かにする計画を総合計画に、活力の項目の一つとして盛り込んではどうかという意見です。こちらについては、他の単位施策において、原案に一定記載しているということで修正なしとしておりますが、委員の皆さんいかがでしょうか。

(一同)

意見なし。

(事務局)

続いて、「情報発信、交流」の分野、No.33～No.35の3項目について、ご意見等ございましたか。

(G委員)

No.33は私の方で書かせてもらいましたが、回答に関してもう少し詳しいお話をいただければと思います。私は、一方的な情報発信ではなくて、SNSが盛んな時代なので、観光に来ていただいた方、住んでいる方がいいところをどんどん発信してもらえるよう、情報発信をするとクーポン券が当たるといったキャンペーンを考えられないかという意図で書かせてもらいました。

(事務局)

たなべ営業室長いかがでしょうか。

(たなべ営業室)

今、たなべ営業室では、先ほど藤田先生の説明にもありました関係人口を広く作っていこうという取組をしているところでございます。以前は、マスプロモーションといいますか、広く田辺市を知ってもらうことに重点を置いたプロモーションに取り組んできましたが、数年前からたなべ未来創造塾という人材育成塾を展開しているところでして、田辺市内における地元の企業者の皆さん方と首都圏を中心とした方々が深く結びつくことで、所謂化学反応を起こしてもらおうという取組をしています。首都圏を中心とした方々に田辺市を訪れていただき、自分事として捉えていただく中で、何ができるのかを考えていただいて、田辺市に貢献していただけるような取組をしているところでありまして、その中で、関係人口を創出していこうという取組を第一義として、考えて実践しているところです。

(G委員)

関係している人にお金も使ってやっている中では、どんどんPRしていただかないといけないと思いますが、私が言っているのは、来た人や住んでいる人がSNS、TwitterやInstagramを使って、田辺市というハッシュタグをつけて発信してもらう、そのPRに対してのキャンペーンという考えです。それによって、溢れるように情報が出ていって、ヒットした人が更にいいところを見直すということにつながると思います。隠れた観光地もたくさんあれば、いいところもたくさんありますが、そういったことをPRできるように発信するのは、実はお金がかからないんですね。お金がかかる取組は少なくて済む、

そんな取組がいいんじゃないでしょうかということです。

(たなべ営業室)

田辺市の関係人口を数えてみますと、この5～6年で深く関わりを持つことができている人々が100人くらいいると感じております。その方々につきましては、SNSでの情報発信が得意な方もいらっしゃる中で、コツコツとジブンゴトとして田辺市を発信しているということは確認が取れています。G委員のおっしゃるように地元にいる我々からの発信力が弱いことについては、今後も課題と認識していますので、力を入れて取り組んでいかなければならないところだと思っています。

(G委員)

そうですね。僕は、Twitterを始めてまだ1年も経っていませんが、フォロワーも段々増えていって、150人、200人いて、そこに地元のことを発信すれば、その人たちが見てくれます。若い人たちは、もっとフォロワーのいる人もいるわけで、そういうところとつながっていくきっかけに、認知度を高めるようなキャンペーンができればと考えていて、大きく発信することももちろん大切ですが、今後5年間を考えたときに、それぞれ個人からの情報発信も考えるべきではないかと思います。今後の5年間には、大阪万博もありますので、そういったことも併せて盛り上げられるようにしてはどうでしょうかということです。

(事務局)

たなべ営業室長の回答にもございますように、計画の情報発信、交流における一つ目の施策の展開の中で、「多様な媒体を活用した戦略的な情報発信を行う」とさせていただいております。そのことに基づいて、先ほど室長から申し上げたことも含めて進めていくということですが、いかがでしょうか。

(G委員)

情報発信の一つとして考え、具体的に進めていただければ、大丈夫です。

(B委員)

この部分で盛り込むべきか分からないですが、ジブンゴト化、定住されている人口の方でジブンゴト化して自ら発信していく取組を進めていきたいという説明があったかと思いますが、計画での情報発信、交流というと、国内外での認知度が高まっているので、外向けに発信して、外からも発信してもらおうという形で入ったんですが、そもそも定住人口の中でジブンゴト化してくれるような人をもっと増やすということは、総合計画に盛り込むのは難しい、というか盛り込まない方がよいという考え方でしょうか。

(たなべ営業室)

ジブンゴトとして捉えていただく方々につきましては、今現在、首都圏に在住されている方々と、その関係人口の方々を想定しており、ジブンゴトとして、遠くから田辺市を見て、田辺市のいいところを発信していただけているかと考えています。ただ、おっしゃられたように定住人口に向けた情報発信については、取組の弱い部分がございますので、今、田辺市に住んでいただいている方々からも情報発信していただけるような取組を今後考えていけたらと思っています。

(B委員)

ありがとうございます。高校生があんなにちゃんとジブンゴトとして考えていて、突然振られても、1時間の議論がきっちりできるくらいになっていることを思うと、今回4人だけでしたが、学校内でそういうのを立ち上げていけるような状況になってくれば、将来的には、若者世代の声がどんどん反映されてくると思いました。想定している対象とは異なるかもしれませんが、情報発信、交流といった観点からは考えられるのかなと思った次第です。

(藤田会長)

あまり会長の立場で申し上げない方がよいと思っはいますが、高校生座談会での議論をさせていただいた責任上申し上げますと、情報発信すべき対象というのは、確かに一つは関係人口というターゲットであることでもいいと思いますが、先ほど申し上げた還流人口といえますか、今、田辺にいる若者たちと、出ていってしまっている若者たち、この人たちにどう田辺の力になってもらうかという発想が非常に大切で、そのための必要な情報発信やツールの開発のような視点というのが、本当はこの情報発信のターゲットとして明記すべきではないかと思っています。例えばですが、いわゆる就職活動的なインターンシップではなく、市内の各高校での夏休みの共通プログラムのような形式で、教育委員会と連携して、田辺を知るようなツアーを高校生向けにやる、そういったこともすべきだと思います。田辺よりも少し地方の中山間地域で、他出するしかないという地域では、高校の同窓会と連携し、同窓会報にふるさとの動向を掲載することも取り組んでいます。他の地域に出ていった人たちの多くは、どこかで地元で想いが引きずられているところがあると考えており、「他出してしまって関わりようもないが、地元はどうなっているのか」と思っている人たちに、多様な関係の持ち方を示すこと、あるいは、何年後かに帰ってくるためのプランにつながるような情報を伝えるといった細やかなところが必要ではないかと思っています。関係人口というと、首都圏や関西圏に偏りがちですが、効果がどこまであるのか検証することが難しい部分がありますので、地元の若者たちと出ていった若者たちに何を届けるのかという視点の情報発信が必要な気がします。

(事務局)

それは、いわゆるUターン施策でしょうか。

(藤田会長)

今までのUターン施策で、若者、高校生を捉えていないと思いますので、還流人口をどう拡げて、裾野を拡げていくのかという視点から、情報の届け方を含めて考えるということだと思います。それは、現役の中高校生向けに届けなければならない情報の届け方と、他出して30代、40代になって同窓会からの連絡を受けるだけになってしまっている若者たちに、いかに高校生の同窓会ルートで地元の動きを伝えていくのか、そこは必要ではないかと考えています。教育委員会の協力が不可欠だと思いますが、既に取り組を始めているところもありますので、田辺市もやってもよいのではないかという気がします。

(事務局)

この件については、宿題をいただいたということで、今後調整させていただいて、次回の審議会でお示しさせていただきたいと思いますが、商工振興課から何かご回答ありますか。

(商工振興課)

都会の人たちの関係人口をという話ですが、商工振興課では、ウェブマガジンの「たなごち」を運営しており、U・I・Jターンで来られた10名程の方々がライターとなって、今日はアユを釣りに行った、ヒガンバナが咲いてるのを見に行ったなど、そうした日々の暮らしの風景とともに、田辺市の隠れた魅力を書き込んでいただいています。令和元年度は、閲覧者が733人、2,900回程度のページ閲覧数でしたが、令和2年度には、閲覧者が約8,000人、ページ閲覧数が約36,000件と、非常に多くの方々に見ていただき、田辺市の魅力を知っていただくことができています。これも一つの還流人口をつくる取組だと考えています。後期基本計画に盛り込む、盛り込まないは別として、そうした事業を展開していることについてはご紹介させていただきます。

(C委員)

還流人口の話ですが、還流人口をターゲットにした場合、今田辺市に住んでいる人たちに向けた内向きの情報発信をやるということだと思いますが、今、市が頑張っているのは外向けの情報発信、外に住んでいる人たちへの情報発信ということなので、今までとは異なる施策かと思います。ですが、確かに高校を卒業して、大半が出ていくこのまちの特徴からすると、そこをターゲットにしていずれ帰ってきやすい素地を作っていくというのは時間のかかることではあるかもしれませんが、重要なことだと思います。その視点は、今まで自分の中でも漏れていたという気がします。

(藤田会長)

逆に言うと、その視点が盛り込めるのは総合計画しかないような気がしています。

(事務局)

一定、この還流人口については、関係課と協議いたしまして、盛り込む検討をさせていただくということよろしいでしょうか。

(一同)

異議なし。

(事務局)

第3回には間に合うように対応させていただきたいと思います。

続きまして、農林水産業分野について確認したいと思います。No.36 からNo.44 までで、ご意見ございませんか。

(F委員)

No.39 からNo.42 について意見を出させていただきました。No.41 で、計画案を修正いただいています、そのとおりに進めていただければと思います。

(事務局)

他にこの項目でご意見等ございませんか。

(G委員)

No.37 の果樹王国について書かせてもらいましたが、田辺市はいち早く平成20年、2008年に果実酒の特区を取っていると思います。梅酒をメインにした考え方だと思いますが、農家が梅を作って、加工業者が加工するという、田辺市全体で六次産業化の構造になっているということも回答には書かれています、果実酒の特区を取るということは、作っている農家でも、自分のところでそれを作る、六次化を目指すような先迫的な施策だったのではないかと考えていますが、それが、回答では後退しているように感じましたが、いかがでしょうか。

(農業振興課)

回答につきまして、一次産業において、農業分野においてはご承知のように、田辺市では梅とみかんが基幹産業となっています。その中で、みかんについては、六次産業化には至っていませんが、梅につきましては、収穫から加工、流通、販売まで、そういうシステムが現在できていると市としても考えています。そのような中で、今後どのようなサポートが必要かというのは、市として検討していかなければならないと考えていますが、梅については、

ある程度そういうシステムが構築できていると考えていますので、このような回答とさせていただきます。

(G委員)

六次化は、県も推進していることですし、全体としてというのがありますが、取り組む若者にとっては、お客さんが見える、お客さんも作っている人が見えるという点があります。今のシステムはもちろん大切にしながら動かして行って、新規参入する人も面白いことができると思っています。その後ろ盾となる施策も併せて考えていただければ、戻ってきて農家をやろうという人も出てくるのではないかと思います。

(事務局)

「新たな果樹等の産地化を進めます。」ということの記載が計画にあります。この中にも六次産業化が含まれているということの考え方でよろしいでしょうか。

(G委員)

そうですね。果樹王国ですから、梅、みかんで培ったノウハウを、他の作物にどんどん生かしていけば、克服しなければならぬ環境や天候はありますが、いろいろできるのではないかと思います。

(事務局)

それでは、こちらの文章の中で対応させていただくということよろしいでしょうか。

(G委員)

わかりました。

(藤田会長)

たしかに六次産業化というのは、今の農業や農村の抱えている諸問題の解決の方法ということで、国も力を入れているところではありますが、一次産業、二次産業、三次産業、その分野の人材育成を地元で行っていくということで初めて雇用の確保にもつながっていくところがあって、今は相当完結した六次産業化のシステムを作ってはいますが、他のところはどうかと言うと、必ずしもそうではないというのが現状だと思います。梅についても先ほど高校生が言っていた着地型観光という視点から言うと、もっとツーリズムとの連携、いわゆる体験ですが、コロナの時代なので短期的には難しいかもしれませんが、中長期的に見れば、その部分の価値というのは大きいと思います。そういったネットワークをもっと地域循環型で仕組みをつくれるような場があるのかどうかというところですが、農業だけでなく、後に出てくる商工業者と地元の農の資源を活用することについて、知恵を練るような場や

機会が今まで田辺でどういう形であったのか私は分かりませんが、もし、それがあまりなかったのであれば、そういうネットワークの場、商工業の方と一次産業、農林漁業の方とのネットワーキングをする場というのはしっかりと作っておく必要があると思います。また、それが将来的には雇用の確保につながっていくような手がかりにもなるのではないかという気はしています。

(E委員)

農協と生協は連携して、生協の組合員がこちらに来て、梅やみかんの収穫体験など、いろいろと交流はされています。梅に関しては、青梅・白干し共に若い人たちがネット販売をかなりやっています。上芳養は、みかんの鳥獣害被害がすごいので、みかんから梅に転作がかなり進んでいます。

(藤田会長)

観光と結びつけるというのはなかなか難しいですが、最近は農業に関心を持っている若者も増えているので、ワーキングホリデー的な形で、梅やみかんの摘果や選定、できる作業とできない作業があるかもしれませんが、そうしたことも場合によっては、ツーリズムの一環として商品に組み込むことも考えられますし、それがきっかけとなって担い手になりたいという若者も最近はいないことはないので、そういう視点も含めて、六次化の多様な可能性を考える場というかネットワークがあってもいい気がします。

(E委員)

若い人たちは、秋は紀北の柿、6月は梅という形で季節ごとに回っている人たちを雇っています。

(藤田会長)

単に雇うというだけでなく、担い手にするくらいのつもりでやるのがよいと思います。

(G委員)

私も先週、北海道のぶどうの収穫のボランティアに行ってきました。ぶどうの場合は、作って最後にワインにして販売までするので、六次産業なんですね。ボランティアの話から言うと、全国から交通費や宿泊費を出して、その地域に来る仕組みがあって、逆に言えば、そのことで一番人手が必要な時期を乗り越えて、ぶどう農家が成り立っているという部分があります。そういったことを、梅やみかん、他の作物でも、本当に手弁当で皆さんくるような時代になりつつあると感じています。

(藤田会長)

農業に関しては、流労働参加型の関係人口という言い方をしていますが、そういうのも有りかなという気がします。

(農業振興課)

農業につきましては、先ほどE委員からもご指摘がありましたように、労働者、後継者問題もございまして、いろんな場面で後継者の確保や、新たに農業にチャレンジしていただける方のマッチング等、取り組んでいます。また、交流という面で言いますと、グリーンツーリズム、これにつきましては、まだプランの完成まで進んでいませんが、体験型の旅行プランを今年度に取りたいと考えています。当初は、令和2年度で完成させる予定でしたが、コロナ禍でプランの作成まで至らず、翌年に一部事業を延期したところです。

(事務局)

続いて、商工業から起業・創業、雇用・就労、No.45 からNo.48 まででご意見等ございせんか。

(G委員)

No.47 に若年層の起業という意味で書かれていますけれども、私、改めて田舎に戻ってきて、そこらへんが引っ掛かりまして、60代でも気持ちは若者のように、体力もある人もいるけれども、様々な支援制度で年齢制限があるので、ある程度、知識も経験も積んできた人が戻ってこようとしたときに、後押しできるようなものがあればと思います。もちろん若い人に残ってもらって、子供が生まれてというのも大切ですが、人生100年と言われる中で、高齢層に向けた支援もあってもよいのではと思います。

(商工振興課)

商工振興課では、商工会議所と連携して創業支援セミナーを実施しており、若い世代から60・70代の方まで受講いただいています。特に年齢制限は設けていませんので、起業される方で、要件さえ合えば支援できる施策となっていますので、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

(藤田会長)

今のお話に関連して、私は年齢の制限を設ける必要はないと思っていますが、むしろ先ほどの話で言うと、高校生が夏休み等の期間を利用して、起業・創業されたところにインターンシップ的に伺って、どんな形で起業化ができるのか、疑似体験できるような仕掛けがあるとよいと考えています。企業に雇ってもらえない以外の仕事、働き方もあり得ることを知ってもらうことも、芽が開くチャンスになると思いますので、是非そういうことをされてはどうかと思います。

(事務局)

その他、特になければ次に移りたいと思います。
観光から山村、移住・定住、No.49 からNo.57 まででご意見等ございませんか。

(G委員)

No.51 の道の駅のことについて書かせていただきましたが、老朽化が進んでいることは市も理解されているようで、発信の拠点でもありますし、なかなか普通にお店、観光、土産、作っていくのはリスクも高くできないと思うので、そういうところからスタートするのに、文章にはないかもしれないが力を入れていってもらえればと考えています。

(観光振興課長)

道の駅は市内に7駅ございまして、1駅が直営となっている以外は、指定管理で行っていただいております。商品の選定を含め、道の駅の運営については、指定管理者の方で、イニシアティブをとってやっていただいております。特色のある道の駅につきましても、行政と指定管理者が一体となって進めていきたいと思っております。

(B委員)

田辺市では、世界遺産も含めて内陸側がフューチャーされているのかなと思いつつ、天神崎が最近ウユニ塩湖のような写真でかなり有名になっていて、和歌山県の写真コンテストでも天神崎が取り上げられていたかと思っております。現行の記載で、「海、山、川、温泉など」という記載があり、観光資源の中に海岸地域や本州最北限のサンゴの海という観点も入っていると思っていて、海岸域をあえて観光の中に位置づけるのも一つの手だと思いましたが、市としては、計画への文言としては盛り込まず、個別具体的に組み込んでいくという考えでしょうか。

(事務局)

海、山、川、温泉、プラス海岸域、ということですが、いかがでしょうか。

(観光振興課)

海岸域については、海の中に包含されるものと考えていますので、現行の記載で対応したいと考えています。

(B委員)

わかりました。

(事務局)

次は、第6章「快適」に関する項目に移らせていただきたいと思います。数も少ないため、交通からごみ・リサイクル、No.89 からNo.94 まで一括して進めさせていただきます。

(一同)

意見なし。

(事務局)

続いて、次第では、第7章「計画推進」ほか、とさせていただきます。冒頭にも説明しましたとおり、第7章に関していただいた意見については、安全・安心グループで議論することとしております。その上で、第7章を含め、全体的にご意見等ございましたら、この場でいただければと思いますが、いかがでしょうか。

(藤田会長)

座談会に参加してくれた高校生の想いや視点を計画の中に取り入れることについては、各章で様々な議論はできるかと思いますが、後期基本計画ができたときに、資料か何かの形ででも、座談会でどんなことが議論されて、どんなやり取りがあつて、彼らがどんな想いを持っていたのかを記録に残すことは必要かと思っておりますが、高校生座談会の記録に関しては、どのように残すことをお考えですか。

(事務局)

もちろん、議事録という形では残す予定としております。加えて、先ほど申し上げましたように高校生からいただいている意見と、委員の皆さんからの感想、今回、分科会が3つありますので、とりまとめの上、どこまで盛り込めるのか、どのような手法で盛り込んでいくのか、藤田会長にも相談させていただく中で検討したいと考えています。

(藤田会長)

意見の反映については、個別具体的に反映するというわけではなく、皆さんが納得する形で趣旨が修正案の中に入っていればよいと思います。ただ、資料としては、3つの分科会で出された感想・意見の一覧も含めた形でとりまとめ、各高校に提供するのがよいと考えています。一方的に聞いただけで、市は何もしていないのかということになりかねないので、聞いた上でのリアクションは返さなければならないと思っております。

(事務局)

承知しました。高校生の意見と、審議会からいただいた意見をまとめて、各高校にお返ししたいと思います。

(藤田会長)

意識のある高校生たちが、それを見て、先輩たちが関わったことで、田辺市はこういうリアクションをしてくれたんだということも高校生に伝わっていくと思うので、そこはしっかりとやっていただきたいと思います。

(事務局)

そのようにさせていただきたいと思います。最後に、第1回分科会で議論いただきました現本庁舎跡地の利活用に関して、論点を取りまとめ、それらを踏まえた施策の展開の修正を行っておりますので、ご意見を頂戴したいと思います。

(一同)

意見なし。

(事務局)

特にございませんか。現本庁舎跡地の利活用に係る取組につきましては、記載しておりますとおりに進めていきたいと考えていますので、よろしく願いいたします。

4. その他

(事務局)

次第の4、その他について、特に事務局からはありませんが、皆さんから何かございせんか。

(G委員)

今後の審議会のスケジュールについて、変更することは稀だと思っておりますか。

(事務局)

今回、コロナの関係で急な変更となり、申し訳ございませんでした。次回、第3回審議会について、コロナ等状況に変わりがなければ、当初の予定どおり11月8日(月)に実施する予定としておりますので、よろしく願いいたします。

5. 閉会